

わかし灰たちの黒石



第3集 黒石の民俗行事やお祭り



黒石よされ（流し踊り）

目次

表紙・文中の「切り絵」
 題字 佐藤義弘
 須藤重昭

◇	発行のことば	……………	黒石市民財団理事長	佐藤義弘	1
一	大川原の「火流し」	……………	三上英治	6	6
(一)	六百五十年あまりも続いて来た伝統行事	……………			6
(二)	子どもたちと地域の人々との触れ合い	……………			7
(三)	「火流し」当日の準備	……………			8
(四)	行事の開始	……………			9
(五)	子どもの思い	……………			12
(六)	「火流し」の由来について	……………	葛西正勝		17
二	ねふた祭り	……………			21
(一)	黒石ねふたを見て	……………			21
(二)	ねふたの呼び方	……………			22
(三)	ねふたの歴史	……………			27
(四)	黒石ねふたのつくりと特徴	……………			31
(五)	坂上田村麻呂とねふたの伝説	……………			33
(六)	おわりに	……………			35
三	黒石よされ	……………	田澤郁夫		37
(一)	「日本三大流し踊り」の一つ	……………			37
(二)	全国に知られた黒石よされ	……………			38
(三)	黒石よされの歩み	……………			42
(四)	おわりに	……………			46

四 浅瀬石の「灯笼流し」……………三上英治 48

(一) お城があつたころの浅瀬石……………

(二) 浅瀬石の隆盛を築いた城主——千徳大和守政氏……………49

(三) 浅瀬石城の落城……………57

(四) 常縁和尚の哀話と「じよんから節」の発祥……………60

(五) 灯笼流し……………66

五 こみせ祭り……………阿部誠 70

(一) 「こみせ」って何?——「こみせ」の歴史……………70

(二) 「こみせ祭り」への願い……………71

(三) 発展する「こみせ祭り」……………73

(四) 「こみせ祭り」を大事に考える人々の思い……………76

(五) 「こみせ」の夢——これからの「こみせ」……………81

六 雪だるまの里・黒石……………山野井昌関 82

(一) 新しい行事の誕生……………82

(二) 「雪だるまの里」誕生まで……………83

(三) 日本一の雪だるま完成……………85

(四) 一万個の雪だるま……………87

七 りんご祭り……………阿部誠 90

◇ 活用した本や資料……………三上英治 93

◇ あとがき……………編集委員長 94



発刊のことば

財団法人 黒石市民財団理事長 佐藤 義弘

「わたしたちの黒石」（第三集）は、古くから伝わる民俗行事、お祭りなどをとりあげています。お祭りについては、近年はじめたものも（浅瀬石地区の「灯笼流し」など）、ありますが、それらの行事が存続することによって、わたしたちの生活が潤い、色どりが添えられます。

これらの多くは江戸時代に発生をみますが、内容は時代と共に移り変わりがつつあります。例えば民謡などは、天明年間の紀行家、菅江真澄（一七五四〜一八二九）の記録によれば、歌詞は今日のもの大きく異なっています。これは民謡のみならず、行事、お祭りに共通することで、初期の内容はもっと素朴なものであったと考えられます。

また史実しじつと伝承てんしょうは必ずしも一致いっちしませんが、伝承、伝説が多いということは、それだけ文化遺産いざんに恵めぐまれていることになります。

それだけにわたしたちが、ふだんあまり関心を持たない、古い行事、祭事などは、先人の残した貴重きちょうな文化遺産いざんとして、継承けいしょうする義務ぎむがあると考えます。第三集では、皆さんが親しんでいる黒石市の年中行事やお祭りを、誰にでも理解できるように、執筆者がつとめて、平明な文章でまとめていきます。

現在げんざいでは、生産手段じょうほうや情報産業なども、高齢者こうれいしゃがついてゆけないほど、飛躍ひやくてき的な発展を続けています。このことにより、生活環境や見慣なれた農作業の方法も急速に変わりつつありますが、その中であって、古い物事に目を向けることは、より自分自身の人間性を豊かにすることにつながります。

第三集をできるだけ活用してくださることを心から期待きたいします。

一 大川原の「火流し」

(一) 六百五十年あまりも続いてきた伝統行事

黒石市の大川原は、紅葉もみじで有名な中野神社から中野川に沿って五キロメートルほど上流にある集落しゅうらくです。かれんな黄色い花で春を告げる福寿草ふくじゅそうの自生地じせいちとしても知られています。

大川原では、毎年八月十六日、夕闇ゆうやみに包つつまれるころ、集落を流れている中野川で六百五十年あまりも続いて来た「火流し」の行事が行われています。

長さ二メートルくらいの茅かやと藁わらを材料にして作った三隻せきの舟に、高さ三メートルほどの帆柱ほばしらを立て、中野川に押し出し、帆の先に火をつけ、炎ほのおを消さないようにして三百メートルほどの下流まで流します。その帆柱の燃え方によって稲の実り具合ぐあいを占ううらなという勇壮ゆうそうな伝統行事でんとうぎょうじで、青森県無形民俗文化財むけいみんぶくわくに指定していされています。



大川原の「火流し」



(二) 子どもたちと地域の人々との触れ合い

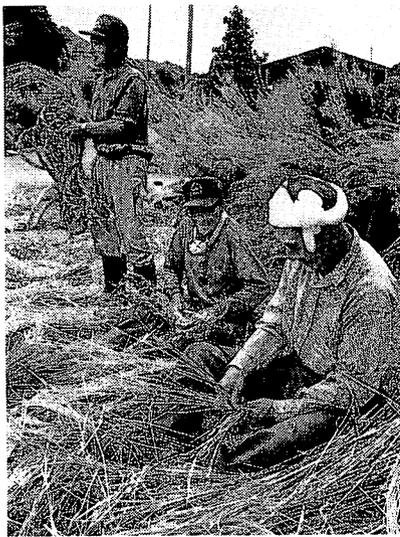
「火流し」をするときの「囃子」は、太鼓・すり鉦・笛を用いて演奏します。大川原の子どもたちは、笛は高学年・太鼓は中学年・鉦は低学年、などというように三種類の楽器をそれぞれが担当し、囃子方として地域の人々と共に「火流し」の行事に参加しています。

太鼓の打ち方、すり鉦の音の出し方、笛の吹き方など、演奏の仕方を地域の「火流し保存会」の人々から教わり、六百五十年あまり、変わりなく伝えられてきた囃子の仕方を覚えて、「火流し」が行われる時に演奏できるように練習します。すばらしい努力であり、大事な体験であると思います。

それは、囃子の仕方を教えてもらっている練習の場で、地域の人々の人柄を知り、その心を感じ取ることができる大事な触れ合いもあるからです。

~~~~~

——私は横笛をやっています。教えてくれるのは佐藤さんという人で、二十歳から五十年間笛を吹き続けている人です。笛の名人でその音色はやわらかくやさしく上品な感じさえします。また、子どもが大好きで、



藁でじょうぶな縄作り

ニコニコしながら一人一人にやらせ、まちがいを直してくれます。また、佐藤さんは笛の段をもち、とてもえらい人なのに、「おめだち、上手になったなあ。跡つぎでぎで、おらさっぱどした。」

と、いかにもうれしそうにほめます。また、佐藤さんだけではなく大人の人も何人か出て練習を見てください。：私は大人になってこの土地をはなれても「火流し」には笛をふくにきたいと思います。

(平成四年度・高橋いくえ)

cccccccccccccccccccc

或いは、地域の人々と行事を進めて行く活動の場で、行事が終了し活動を振り返ってみる場で、大事な学びの体得たいとくがあるからです。

### (三) 「火流し」当日の準備

八月十六日、「火流し」の行事を行う日には、大川原の人たちは、相当そうとうな時間をかけて準備をします。

一戸当たり、茅四束かやよんたばと藁一束わらひとたばを持ち寄り、朝から茅舟かやぶねづくりを始めます。まず、藁わらを材料にし、舟を編あみ上げるための縄なわをないます。縄が仕上がると舟の大きさを見積もって茅かやを敷しき、手作りの縄なわで三隻せきの舟を編あみ上げて



「茅」を敷き、縄でたばね、舟作りの開始



「茅・藁・縄」などを確かめ、舟作りの準備

いきます。そして、茅で作った三本の帆柱をそれぞれ舟にしつかりと立てます。舟が「流し」の途中で破損せず、帆柱も倒れないようにするために、作り方の工夫も必要であり、力の入る仕事になります。午前八時ころから始め、五、六時間かけて仕上げますので、みんな汗びっしょりになります。

行事開始の時刻が近づいてきますと、三隻の舟は出発点の集落上流にある下湯沢橋の下方に浮かびます。舟を押し出す若者たちは、頭に菅笠を被り、すねを痛めないように「はばき」をつける、という野良着姿の身支度をして準備を整えます。昔は、若者たちは大川原の村に住んでいる未婚の男性に限られていましたが、現在では、大川原で育ち、ほかの地域で生活している人も少なくありません。そのような人たちも、「火流し」の時には大川原に帰り、行事に参加しています。「火流し」の日は、そのような人たちの古里での再会の日ともなっています。

#### (四) 行事の開始

日が暮れて、辺りが闇に包まれるころ、安全祈願の神事が終



形を整え、力を込めてしばりつけ



舟の底になる部分～結びをしっかりと

わると、

「帆柱ほばしらに火をつけろ！」

「舟を出せ！」

三隻せきの舟それぞれに、管笠すげがさに野良のら着姿ぎの若者たちが五、六人一組となつて付き添い、火が灯ともされ帆柱ほばしらが燃え始めている三隻せきの舟を、

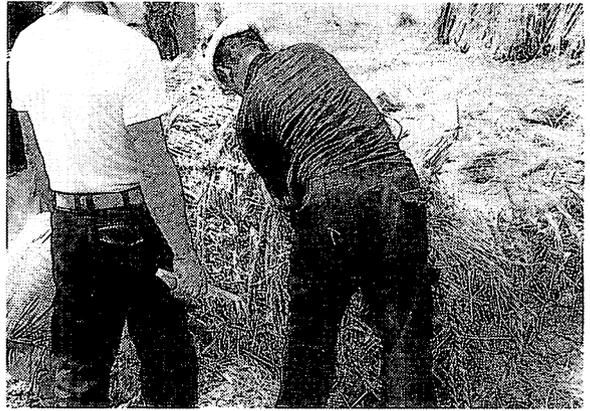
「ヤーレヤーレヤーレヤ！」

のかけ声と共に、先頭の一隻せきに続いて二隻せきめ、三隻せきめと、次々に水流に乗せて行きます。舟が動くと同時に、岸辺からは、哀調あいちようをおびた「火流しばやし雑子ねいろ」の音色ひびが響きわたります。

川の水量や流れは、その年の天候てんこうによって変化もあります。降雨こううが続くと川の水かさが増し強い流れになる、というように、水流じようきようの状況は毎年同じでないわけです。三隻せきの舟それぞれに付いている若者たちは、そのことも考えて舟を導みちびきます。川底の石や浅瀬あさせに触れて舟が進まなくなると、若者たちは「ヤーレ、ヤーレ」のかけ声で舟を流れに引き戻し、下流に向かって押し流します。



舟に立てられた「茅」の帆柱



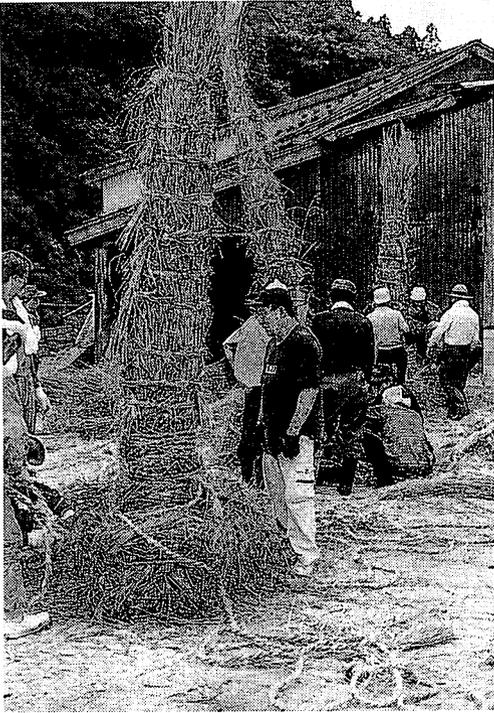
編み上げた舟を点検～弱い所を補充

暗い川の中ですから、舟を押ししたり引いたりすることは容易<sup>ようい</sup>ではありません。しかも、舟は進むほど水を吸<sup>す</sup>って重くなっていきます。水流<sup>すゐりゅう</sup>が狭<sup>せま</sup>く激<sup>はげ</sup>しく落ちる難所<sup>なんじょ</sup>もあります。若者<sup>わかしよ</sup>たちは燃え上がる帆柱<sup>ほぼしら</sup>を倒<sup>たお</sup>さぬように、散り火も浴びながら必死に終点をめざして舟を進めていきます。

川岸では、そのような若者たちと舟の動きにもなつて、村人や子どもたちが、笛・太鼓<sup>たいこ</sup>・鉦<sup>かね</sup>の雑子<sup>はやし</sup>を付け、「ヤーレ、ヤーレ、ヤーレヤ！」と声をかけながら進んで行きます。

川の中で必死<sup>ひつし</sup>にがんばる若者たちと三隻<sup>せき</sup>の帆柱を燃やして流れる舟。六百五十年あまり変わりになく伝えられてきた「火流し雑子<sup>はやし</sup>」。そして、双方<sup>そうほう</sup>のかけ声。それが、一体となつて展開<sup>てんかい</sup>していく「火流し」という思いが沸<sup>わ</sup>いてきます。

流し始めから終了<sup>しゅうりゆう</sup>の間に、三隻<sup>せき</sup>の帆柱の燃え方に明らかな違いが見えてきました。三隻<sup>せき</sup>の舟を早手<sup>わせ</sup>・中手<sup>なかくて</sup>・奥手<sup>おくて</sup>（晩稻<sup>ばんとう</sup>）の稲に見立てて、それぞれの帆柱<sup>ほぼしら</sup>の燃え具合<sup>ぐあい</sup>によって、作柄<sup>さくがら</sup>



三隻の舟～ほぼ完成



帆柱と舟の結び付けも念入りに

を占うわけです。  
うらな

野良着を汗と水でぬらした若者たちが川から上がり、村人たちから慰勞のお酒をいただきました。精一杯の力を出し切って舟の川下りをした若者たちをねぎらうかのように、「火流しばやし離子」は大川原の夜にしみこみ、三隻の舟の帆柱も、残り火静かに燃えていました。  
ほばしら

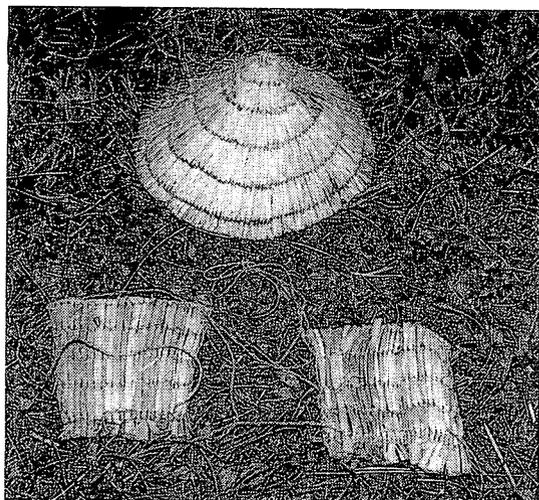
### (五) 子どもの思い

大川原で暮らし、「火流し」に参加していた子どもたちに、どのような「思い」が生まれて来ていたのでしようか。前に述べた高橋さんの「気持ち」や、次に紹介する内容を基に考えてみましょう。

~~~~~

伝統を守る

「メンドウクセエガラ、行ガネクテモイイネ。今



若者が身に付ける「すげがさ」と「はばき」



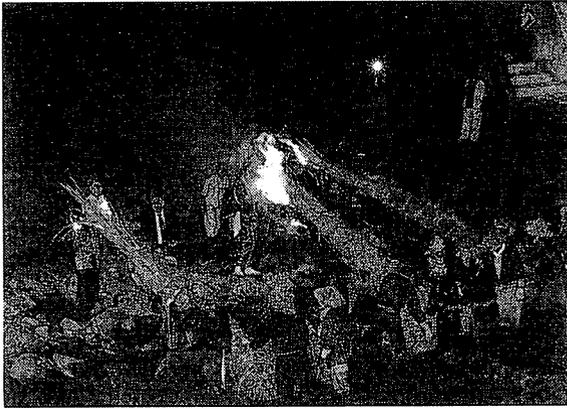
上流より～出発点、下湯沢橋附近と大川原

日、行ガネジャ。」

そんな会話が、最近よく聞こえてきます。集まった人数も、十一人中八人と、だんだん少なくなってきています。練習に来た人たちの中にも、覚えようとしなない人たちもいます。私もその中の一人です。そんな練習も、あつと言う間に過ぎ、とうとう本番になってしまいました。

明日は、大川原の「火流し」です。毎年八月十六日に行われます。約六百五十年前から続けられている伝統の祭りです。村の豊作や不幸のない平和な村にするために行われているのだそうです。毎年受け継がれているこの火流しには、私たちも一年生から参加しています。低学年はすり鉦、中学年は太鼓、そして高学年は笛を主として担当しています。どれも、火流し保存会―私たちのおじいちゃんたちに教えてもらいます。

朝の八時くらいから、おじいちゃんたちが大きなわらの舟を作り始めました。前もって各家庭から集めたわらをたばね、くずれないように縄で固くしばります。その上に、燃やすわらを五メートルくらいの高さまで積み上げています。五時間もかけ



帆柱への点火



安全祈願の神事

てやっと三つの舟が完成しました。すべて準備は整っています。それを見ていた私たちは、急にあせってきました。

「うわー、メンドウクセエー。どうする、何も覚えてネジャー。」

「イジャ、吹イジュウfrisレバイイネ。」

私たちは、おじいちゃんたちの作業を見て見ぬふりしながらも、勝手なことばかり言い合っていました。

たくさんの方が川沿いに集まっています。大川原の火流しを見ようと来てくれた人が、たくさんいるのです。冷たい川の中で、足を岩にとられ、思うように進まないお父さんたちの声の様子を聞きながら、一緒に笛や太鼓を演奏しています。いや、演奏しているふりをしているのです。「おじいちゃんたちも、お父さんたちもがんばっているのに……。」と思いつつも、一応終わってしまいました。

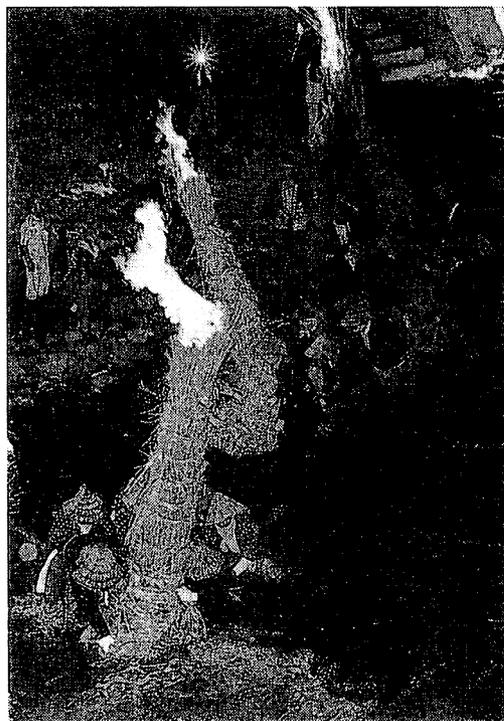
その後、テレビ局の人からインタビューを受けました。

「昔から伝わっている伝統の火流しですが、君たちは受け継いでいこうと思っていますか。」

私は、ドキッとしました。笛を吹けない自分が、見破られてしまったかもしれないと思ったからです。とりあえず、



あませ
浅瀬では、川底に茅舟^{かや}が引っかけり、火柱も大きく傾く～必死で押し出す若者たち



「流し」の開始

「はい、そう思います。」

と、答えたものの、何かすっきりしないものが心に残るようでした。

「私たちが、いいかげんな気持ちでやっていたら、演奏できる人たちがいなくなってしまう。」「演奏できる人がいなくなったら、六百五十年の伝統がなくなってしまう。」そう思いながら、私たちがなん

の努力もしていないことを後悔しました。今年の火流しは、もう終わってしまいましたが、これからは、笛を吹けるようにしっかり練習しようと心に誓いました。

私たちの学校では、大川原タイムとして、火流しのはやしの練習をしています。その時には、二人のおじいちゃんがわざわざ来てくれて教えてくれます。私たちにぜひ受け継いでほしいという願いがあるからだなということが、今になってようやく分かるような気がします。

現在、大川原は三十六軒。だんだん少なくなってきました。六百五十年も伝わってきた伝統の祭りです。きっとみんなが私たちに



中間まで流れたころの帆柱

続けてほしいと思っっているはず。 「練習スルンダラ、オラダチサマガセロ。」
と、自信をもって言えるような大人になりたいと思います。

大川原の川へ、火流しばやしがよく聞こえるように、大川原の伝統は大川原の
私たちが守っていききたいと思います。

火流しの笛とすり金重ね合う 夏の思いで心にしみる

(平成十年度・武蔵絵里奈)

~~~~~

以前、大川原小学校で学んだ子どもたちも、現在学んでいる  
子どもたちも、自分が暮らす地域の「火流し」の行事に参加し、  
地域の人々と共に、このような活動を体験できることは幸せな  
ことです。

身近なところに存在する伝統的な行事の意味を自分自身でと  
らえることができずし、地域の人々の思いや願いを真剣に受  
け止めて考えることもできません。

そして、自分の心身に「ふるさと」を育てることができ  
るかどうか。そのことは、その子の未来の生活に豊かに生かされる  
ものであると思うからです。



「火流し囃子」を奏で、舟の流れに沿って歩む「囃子方」

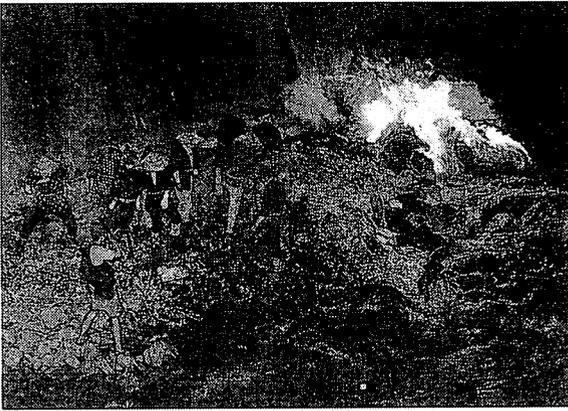
## (六) 「火流し」の由来について

「火流し」の起源については、明確な史実というより、語り継がれてきた内容として次のようなお話があります。

南北朝時代（一三三一年～一三九一年）、九十六代の後醍醐天皇（南朝）の皇子である宗良親王が、戦いに敗れ、その子孫が津軽の大川原を拓いた、ということが伝えられています。

現在の「火流し」は、「稲作の豊凶占い」の意味をもって、いいますが、大川原を拓き住み着いた南朝の人々が、遠い故郷を懐かしむ思いや、戦死した部下や仲間の霊を慰めるために、火を焚いて川に流した「精霊流し」が始まりで、それが現在の「火流し」まで続いていると言われ、伝えられています。後醍醐天皇は延元四年（一三三九年）、八月十六日に崩御なされていますので、「火流し」はその命日に行われていることとなります。

昔は、お盆の十六日の朝、仏壇の前の盆棚に供えたものを菰（あらく織ったむしろ）に包んで川や海へ流す所が多かつ



舟を終点の岸辺に寄せ、引き上げる若者たち

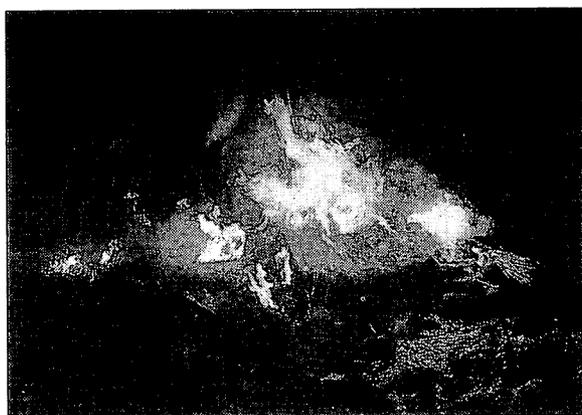


終点間近の難所、押し出しも必死

たものでした。これは、全国的に行われたことで、麦藁<sup>むぎわら</sup>などで舟を作って流したり、火を入れた灯笼<sup>とうろう</sup>を流す所もありました。これは、一般的に「精霊流し<sup>しょうれい</sup>」と呼ばれる行事で、お盆のときに迎<sup>むか</sup>えた先祖様を送ってあげるという意味をもっています。大川原の昔の「火流し」も、そのような意味をもっていたことと  
思います。

また、大川原の先祖は、信濃<sup>しなの</sup>（長野県）大河原<sup>おおかわら</sup>の香坂高宗<sup>こうさかたかむね</sup>という豪族<sup>こうぞく</sup>であるらしいという説も生まれました。それは、昭和五十七年（一九八二年）に、高橋姓の本家である高橋哲雄さんの家から、香坂高宗<sup>こうさかたかむね</sup>という人の子孫<sup>しそん</sup>が、津軽にきて大川原を拓<sup>ひら</sup>いて住んだ、ということが記されている古い文書が発見されたからです。

「大川原火流し保存会」の会長を務めている高橋久作さんが、現在の高橋家の当主<sup>とうしゅ</sup>です。「火流し」のことについて語り合い、そのことが書かれている古い文書全文を読ませていただきました。それには毛筆で、「――信濃<sup>しなの</sup>大河原<sup>おおかわら</sup>香坂高宗<sup>こうさかたかむね</sup>（高坂トモ称<sup>しょう</sup>シ子孫津軽ニ参り大川原ヲ創ス）――」と記されていました。



川のせせらぎの中で、静かに燃えている三隻の舟

しかし、歴史的にみれば、その古い文書の内容だけでは史実として認められることは難しいということもあり、「南朝の落人とは、誰のことなのか。火流しは、本当に六百五十年も続いて来たのだろうか。」など確かめるために、黒石市役所と大川原の人々が、直接、信濃大河原（現在の長野県大鹿村）を訪問しました。

その訪問は、昭和五十七年・平成十四年に行われていました。そして、その関係者と共に調べた結果、宗良親王と親王に仕えたという大河原城主香坂高宗が、大鹿村に実在していたことは学ぶことができたそうですが、その人々や子孫が「信濃の大河原からきて、黒石の大川原に住み着いた。」という歴史的な事実を確認できる文書などは発見できなかったということでした。

そのことについて、平成十四年に訪問したとき、大鹿村の歴史研究者である中村寿人さんという人が、

「信濃の大河原から津軽の大川原にたどり着いて住んだのではないか、ということは十分考えられることだと思います。」

戦いに負けた落人は、近くには住まないものです。宗良親王も吉野（奈

良)から、山深いこの大河原おおかわらに来ています。宗良親王むねながと香坂高宗こうさかたかむねは、ここ  
の大河原おおかわらで亡くなられています。宗良親王むねながと共に来た公家くげや香坂高宗こうさかたかむねの  
子孫などが、味方である津軽の北畠氏を頼って行き、黒石の大河原に住み  
着いたということは、十分考えられることです。

しかも、この大鹿村おおしかの「大河原おおかわら」も、古い文書によると「大川原おおかわら」と書か  
れているものもあります。黒石の大河原おおかわらに住み着いた子孫が、自分たちの  
住んでいた「大川原おおかわら」を、そのまま、村の名前にしたのではないでしょうか。」  
という自分の見解けんかいを話されたそうです。

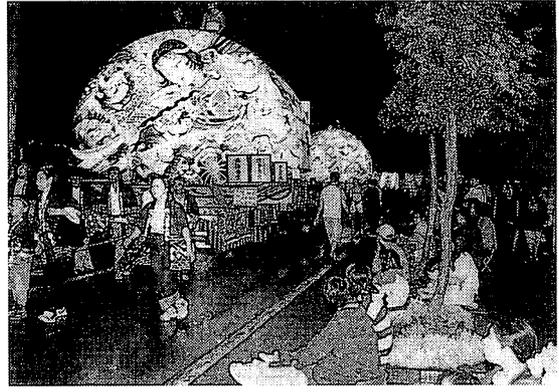
現在、いつ・どこから・どのような人々が来て大川原おおかわらを拓ひらいたのか、と  
いう「火流し」の由来ゆらいに関わることについて、十分に解明かいめいされていない面  
はあります。

しかし、その昔、大川原おおかわらに住み着いた人々が、来る年も来る年も、その  
年ごとに心を込めて、自ら創つくり奏かなでる囃子はやしを添そえ、炎輝ほのおかがやく舟ふねを流し続け  
てきたのは確かなこと。それは、だれもが認みとめる史実しじつではないでしょうか。  
それだけに、大川原おおかわらの「火流し」は、貴重きちょうな伝統でんとう行事ぎょうじであると思います。

(「大川原の『火流し』」の執筆者 三上英治)



大地にとどろくねぶた囃子



次々とくり出すねぶた

## 二 ねぶた祭り

### (一) 黒石ねぶたを見て

今年もまた短い津軽の夏の夜空を熱く焦がすねぶた祭りがやってきました。

今も、ドーンコドンコ、ドーンコドンと、ねぶた囃子の太鼓の音が、大きなうねりのようにあたり一面に響きわたります。見ると、明々と灯をともした扇形のねぶたがゆっくり近づいてきます。表面には、勇ましい武者絵が今にも飛び出しそうな迫力で、背面には、中央に美しい女の人の絵、そのまわりには、もの寂しい感じがする絵が描かれています。

そのねぶたが、子どもたちの元気のよいかかけ声や、太鼓や笛などのねぶた囃子といっしょに、夕闇の中を次から次へと通りすぎていきます。どのねぶたも、負けず劣らず華やかで、その美しさに見とれてしまいました。

今では、日本の祭りを代表するほど有名になったねぶた祭りは、いったいどんなことから、いつごろから行われるようになったの



豊歳祭、二星祭、七夕祭と書かれた昔の黒石のねぶた

でしようか。

## (二) ねぶたの呼び方

ねぶたを昔はどのよう呼んでいたのでしょうか。

昔の黒石ねぶたのことを記録している、「分銅組若者日記」を

見ると、ねぶたのことを豊歳祭とか二星祭、七夕祭とだけ書いて

いて、ねぶたという呼び方は、どこを見ても一字もありません。

弘前や他の地方の場合はどうでしょうか。記録を調べると、

おおとろうろ  
大灯笼、ねむた流し、ねぶた流し、七夕祭、二星祭、合歡祭、ね

ぶた、ねぶた、ネムタ祭、ねぶた喧嘩などの呼び方が使われてい

ます。もう少しくわしく見ると、その呼び方は統一していません。

人によっても、時代によってもまちまちです。例えば、享保七年

(一七二二年)の記録には、ねぶた、ねむたと一つの文の中だけ

でもちがった呼び方をしています。また、同じ享保七年(一七二

二年)七月に、「信寿ねむた流し観覧」とあるのに、享保十一年

(一七二六年)七月には、「信寿七夕祭を観覧」と記録されています。

このように、昔のねぶたのことをある時はねむた流しと呼



昔の上町のねぶた



昔の七夕の夜

んだり、ある時は七夕祭と呼んでいました。

ここで、ねぶたと七夕について考えてみましょう。

七夕はもとは中国の行事であり、日本には奈良時代に伝わりました。

七夕の日に星に願って叶うのは、人々が抱く何の願いでもよかったのではなく、技術、特に手で行う技術が上手になることでした。この七夕のことを別な言い方で乞巧といえます。乞巧とは、裁縫などの技芸が上手になりますようにと願うことです。織女星は、機織りが上手だと信じられていたので、人々は同じようになりたいと願ったのです。七夕の夜に、盥に汲んだ水に月の影を映して、その光で針に糸を通すことをやって、それで通すことができた人は縫い物が上手になるといわれました。それが、いつの間にか縫い物ばかりでなく、音楽やいろいろな芸事の上達をも願うようになりました。この行事を乞巧奠ともいいます。

天保十二年（一八四一年）に黒石の上町が出した灯笼

は、机つくえの上に書道の道具一式いっしきをのせているものです。きっと、書道が上達  
しますようにとの願いの表れだったのでしよう。

七夕たなばたが乞巧奠きつこうてんであり、人々は、この日はねふたを出すものと思っていた  
にちがいありません。「七月晦日ついたち乞巧奠有ネブタ」と五所川原の平山日記（宝曆  
六年 一七五六年）では、乞巧奠きつこうてんにルビをふってネブタとしています。

このように、昔は、ねふたと七夕祭きつこうてん（乞巧奠）とは、同じことであると  
いっていいほど深い関係にありました。

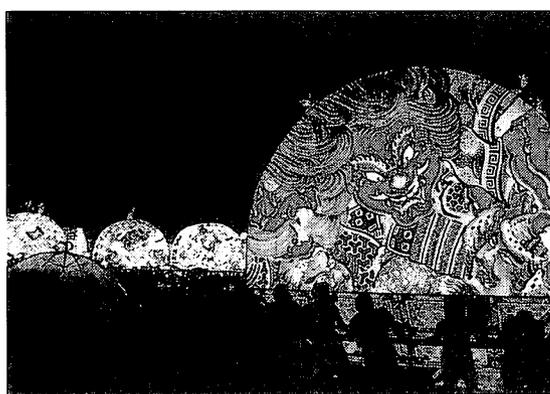
次に、ねふたという呼び方はどこからきたのでしうか。

ねふたは、旧曆きゅうれきの七月一日から七日までの七日間行われ、最終日さいしゅうびの七日  
目を七日日なぬかびといって、この日は川原でねふた流しをしました。弘前であれ  
ば岩木川で、黒石では浅瀬石川というように、津軽つがる地方の多くの川で行わ  
れました。

その日の様子は、朝早くからねふたを近くの川に持って行き、川の水で  
ねふたを洗あらい紙をはぎます。大きいねふたは、次の年も骨組みほねぐみを利用する  
ので、タワシなどできれいに洗あらい、はいだ紙は川原で燃もやしました。その  
時歌ったのが、黒石では、「ねふた流れろ 豆まめの葉サ止まれ ヤレヤレ  
ヤレヤ」というはやし歌で、昭和二十年代ころまでは行われていたよう



人形ねぶた



扇ねぶた

す。

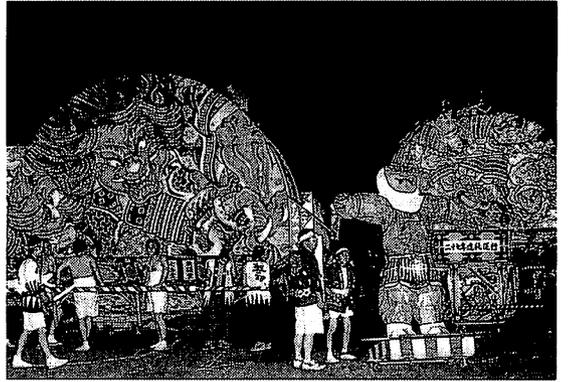
これと同じはやし歌が、江戸時代の寛政五年（一七九三年）の記録にあります。そこには、「ネムタは流れる 豆の葉はとどまればよ」と書かれていて、その意味を、ネムの葉で目をこすり睡魔（ねむ気）をはらうからだとか、マメとは健康であることと説明しています。

水によって罪や穢を洗い清めることを禊といひ、何か身代わりの物で清めることを祓といひます。前のはやし歌でいえば、水で清めるのが禊で、ネムの葉で目をこすり流すのが祓です。

ねぶた流しと禊や祓についてよく知っている人は

「昔、七日日には牛や馬に水を浴びせ、子どもたちを、水浴びさせ、農機具を洗い清め、井戸をさらったりした。いわば、身の穢を流す禊であって、津軽の人々はこの日、ねぶたに罪や穢を託して川に流したのである。」と、話しています。

この話にもあるように、罪や穢などを身代わりの人形などに撫でつけて、川に流した身代わりの人形のことを贖物といひます。ねぶた灯籠も一つの贖物と考えられます。



出を待つねぶた

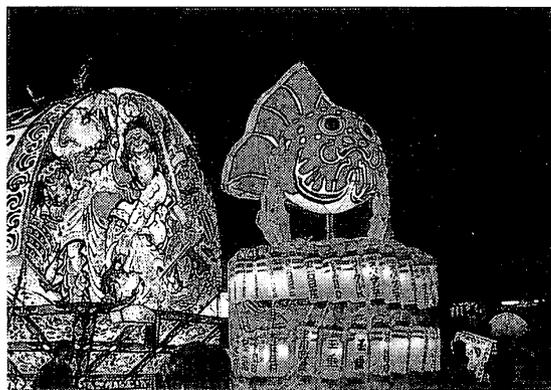
また、七日日には、古くからねむり流しとって、農作業がきつく、暑さがきびしい季節に、川の水で体を洗う禊などの方法で睡魔を追い払おうとしたならわしが、全国各地で行われていました。

ねぶたと呼ばれるようになったのは、農作業の妨げになる睡魔ややる気をなくする怠け心などを、川の水に流すねむり流しがなまって、ねぶた流しになったのではないかといわれています。

そのねむり流しに、津軽の人々は、ねぶた灯笼を作り、ねぶたの行事を行うことを通して、秋の豊作や幸せを祈願したのではないでしようか。今では、江戸時代からずっと続いてきたねぶた流しも、ほとんどなくなりました。

明治に入ってから、佞武多、稔富多と漢字を使った勇ましい感じのする書き方が多く使われています。これは、発音より漢字の目で見た印象を強くしようとしているからです。

現在は、弘前はねぶた、青森はねぶたと呼び、そのちがいを発音で区別しています。黒石では、昭和四十七年から弘前と同じようにねぶたと呼んでいます。



前ねぶた

### (三) ねぶたの歴史

黒石をはじめ津軽のねぶたが、いつごろから始まり、どんな形であったのかなどについて、はっきりしたことはわからないが、残っている記録から、その移り変わりをたどってみることにしよう。

文禄二年（一五九三年）七月、津軽藩祖為信が京都に滞在していた時、うら盆会に二間四方の大灯籠を出して、京都の人たちから、津軽の大灯籠と評判になったことが記録に書かれています。でも、このことが、ねぶたの始まりの年代としてよいかどうかは

明確ではありません。

享保七年（一七二四年）七月に、五代津軽藩主信寿が城下に出て、ねぶた見物をした記録があります。この時代になると、ねぶたはかなり盛んに行われていたようです。実際、信寿は、毎年のようにねぶた見物をしていきます。

黒石ねぶたを見ても、「山田家記」（天明六年・一七八六年）に、「七夕祭り、例年の通り賑々しく」とあります。毎年のように賑やかに行われたということから、黒石では、かなり前から、七夕祭が盛大に行われてい

たことがわかります。でも、ねぶたの行事を黒石では、ねぶたとは呼ばないで、ほうさいまつり豊歳祭とかにせいまつり二星祭、七夕祭などと呼んでいたことは前に述べた通りです。

ねぶたが絵に描かれていた資料として、てんめい天明八年（一七八八年）にひらのさだひこ比良野貞彦（弘前藩江戸定府の藩士）が、津軽に来た時に描いた「子ムタ祭之図」があります。それを見ると、今のねぶたの形とは非常に違っていて、四角や長方形の灯笼とうろうが描かれています。灯笼には絵はなく、七夕祭とか二星祭、織姫祭などと正面に文字が書かれ、横には同じように石投無用

と書いています。大きいものは、神輿みこしのようにたにんずう多人数で担ぎ、小さいものは一人か二人で持っています。まわりには太鼓たいこをたたいている人も見えます。また、絵の中に、「ねぶたはながれる、まめの葉はとどまれ、いやいやいやよ」と、雑子はやしこどばが書かれています。

この絵に描かれているように、最初のころのねぶたは、四角や長方形の素朴な形そぼくのものがほとんどでした。それが、時がたつにつれて次第しだいに変化へんか

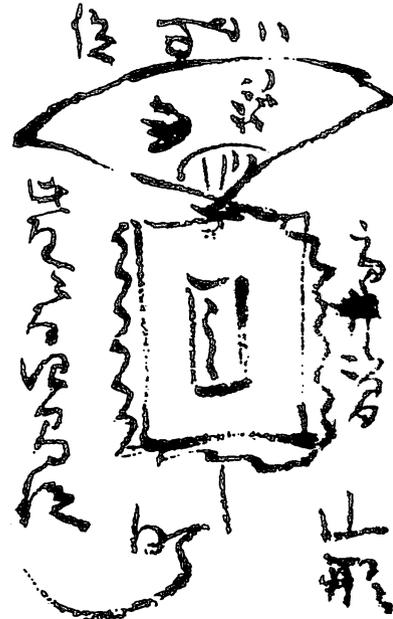


子ムタ祭之図

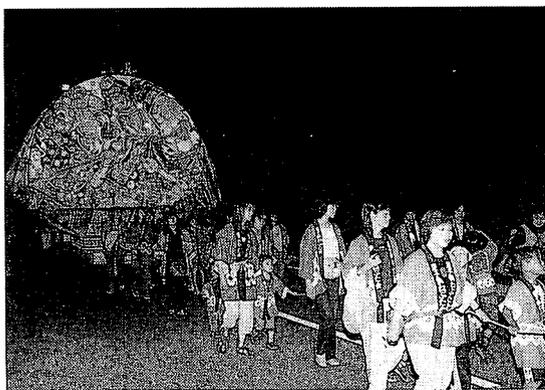
していき、作り方もいろいろ趣向しゅこうをこらすようになり、人形かざりや飾り物ものなどさまざまなものが見られるようになりました。また、大きさも大型化おおがたかしてきました。

嘉永五年（一八五二年）の黒石ねぶたの資料しりょうを見ると、扇おうぎを額がくの上にのせた灯籠とうろうの絵が残っています。その絵は、ねぶたが立体であるかどうかかわかるように描かれていないので、扇の奥行きおくゆきはわかりません。もしかしたら、現在げんざいの扇おうぎねぶたのように厚さあつがなかったのかもしれない。ただ、黒石に残された資料しりょうの中で、扇おうぎを型かたどったのはこれだけです。それだけに、ねぶたの形の移り変わりを知る上では大事な資料しりょうです。

明治十一年に、たまたま黒石の七夕の時に来た、イギリス人のイサベラ・バート婦人ふじんが、紀行文きこうぶん「日本奥地紀行にほんおくちきこう」に、黒石のねぶたの運行うんこうの様子について「この行列ぎょうれつは、とても美しく絵のようであった。行列ぎょうれつには、巨大な太鼓たいこが三つ、小太鼓こたいこが三十あって、それが休みなく打ち鳴らなされる。それから何百ななひゃくという提灯ちようちんが運ばれてくる。大きな提灯ちようちんには、さまざまな神秘的しんびてき



昔のねぶた



綱引く子どもたち



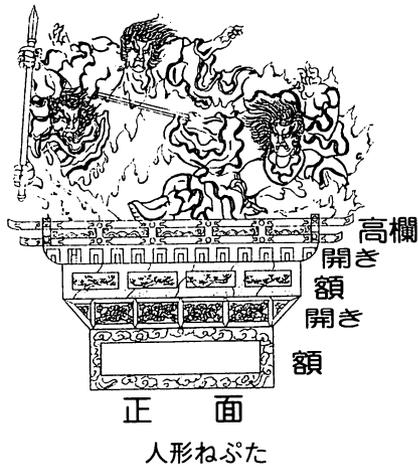
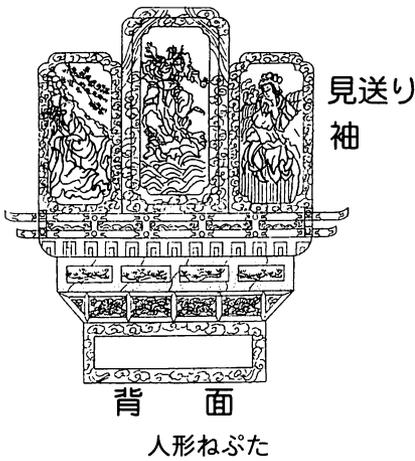
子ども先導のねぶた

な絵が極彩色で描かれている。提灯というよりも、むしろ透かし絵である。それを取り囲んでいるのは、何百というめずらしい形をした扇や魚、鳥、凧、太鼓などの提灯や透かし絵であり、何百人もの大人や子どもが続ぎ、みな丸い提灯を手にしていった。私は、このようなお伽話の中に出てくるような光景を今まで見たことがない。」と、その華やかさを書き留めています。

戦後のねぶたは、それまでは旧暦で行っていたのをやめて新暦で行うようになりました。それに、今はどこでもねぶた祭りを、夏まつりの行事の中に繰り入れて行うようになったので、時期や日程はそれぞれがちがっています。

黒石のねぶた祭りも、今日のように黒石市内及び、近隣町村の町内会、または、各ねぶた会ごとに行われるようになったのは、戦後であり、昭和三十年からは、黒石青年会議所が主催しています。また、平成五年四月十六日には市民総参加の祭りとして「県無形民俗文化財」の指定を受けました。

このように、ねぶたの歴史は古く、その起りは江戸時代までさかのぼり、その形や絵柄などは、時代によって大きく変わって



きました。でも、今日まで絶えることがなく受けつがれてきたことは、ねぶたに対する人々の熱意の表れです。

(四) 黒石ねぶたのつくりと特徴

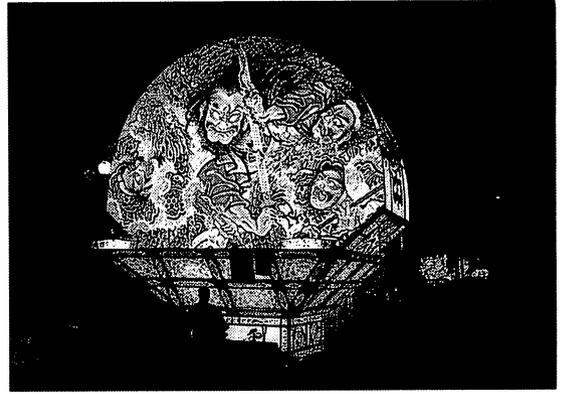
ねぶた灯笼の形を見ると、現在では扇と人形の二種類があり、人形ねぶたを組ねぶたともいいます。中心になる大きなねぶた灯笼を本ねぶた、その前に行く小さな灯笼を前ねぶたと呼んでいます。黒石ねぶたのつくりについて見てみましょう。

人形 上から①本体である人形、その後ろの見送り、その左右の袖、②高欄、③開き、④額、⑤開き、⑥額、扇 ①扇、扇の背面には見送りと、表面と対照的な絵の仕切られた袖、





背面の見送り



表面の鏡絵

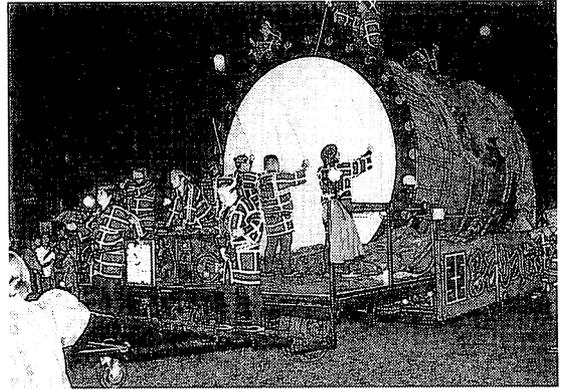
②開き、③額がく

黒石ねぶたを、青森と弘前のねぶたと比べてみましょう。

黒石では、古くから人形ねぶたと扇ねぶたの両方があり、それが共存きょうぜんしてきていることと、背面はいめんに描えがかれる見送りみおくりという額絵がくえがつくことが特徴とくちょうです。扇ねぶたの表面は、鏡絵かがみえといつて、多くは三国志さんごくしや水滸伝すいこてんから取り入れた武者絵むしやえが、背面はいめんの見送りの絵は美人画えがが描えがかれます。それを見る人は、表面の豪華絢爛ごうかけんらんな動の世界どうに對して、背面はいめんはもの寂さびしさを表した静せいの世界で、この好對照こうたいしょうな幻想げんそうの世界に、引きこまれてしまうのです。それに、”ヤーレ、ヤーレ、ヤーレヤ“のかけ声がよく調和ちょうわして、黒石ねぶたがもつ独特どくとくの雰囲気ふんいきを醸かもし出しています。

これに對して、青森は人形ねぶたが主で、最近さいきんは、歌舞伎かぶきの場面ばめんから取り入れたものが多く、これに、花笠はながさをかぶったハネトといわれる踊り手おどが”ラセ、ラセ、ラッセラー“のかけ声をかけながら踊り回るので非常に華やかはなです。

弘前は、伝統でんとう的に扇ねぶたが多数たしを占めていて、描えがかれる絵も黒石のねぶたとほとんど同じです。かけ声は”ヤーヤドー“と



黒石のもつけ太鼓

勇ましく、それがいかにも城下町らしい気風を漂わせています。

◆ 黒石もつけ太鼓

昔から、ねぶた祭りの引き立て役の一つとして欠かせないのが太鼓でした。今は、上に何人もの人を乗せることができるような、大きな太鼓が各地に登場しています。そして、そこから打ち鳴らされる音は、まるで天地を揺るがすほど大きく力強いものです。そうした太鼓が黒石にもあるのです。

その太鼓について見てみましょう。

それは、昭和六十年に黒石青年会議所三十周年記念事業として、「子どもたちに夢を、ふるさとに誇りを」という目的で、世界一の大きさのねぶたと太鼓を、黒石市民の総力を結集して作りあげました。

この大太鼓は、黒石もつけ太鼓と名付けられ、いつもは、御幸公園内に保管していて、ねぶた祭りの期間中運行されています。

(五) 坂上田村麻呂とねぶたの伝説

ねぶたの起りとして語られるこの伝説は、歴史的事実でないことははっ

きりしていることですが、どんな内容か見てみましょう。

ここに登場する坂上田村麻呂は、平安時代のはじめに征夷大將軍として蝦夷地を平定した人です。その時にいろいろな伝説が生まれたのです。その中にねふたに関することもあり、その大まかな話は次のようになっていきます。

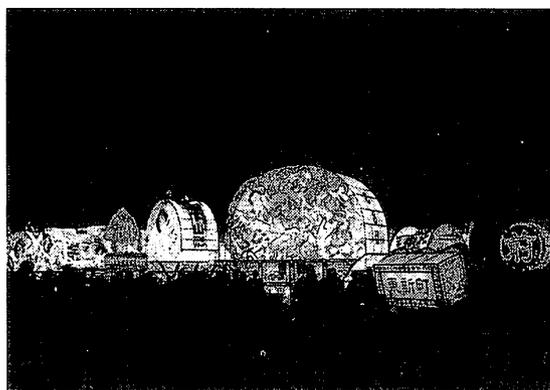
蝦夷が反乱を起こしたので、田村麻呂が来て討伐しました。その時の計略が三つありました。一は、鉦を鳴らし松明を照らし、槍隊を組む。二は、木の枝に紙を張り灯笼を付け板をたたく。三は、灯笼様のものと数千の松明を照らす。そして、勝利の後に蝦夷人をさとして、「ネブタ ナガレヨ マメノハ トドマレ エヤエヤヨ」と告げた。というのです。

また、大丈丸という蝦夷の首長が岩木山に立てこもり、田村麻呂の軍を悩ましたので、美しい人形の中に人をかくして川へ流したところ、それに誘われて大丈丸が出て来たのを捕らえた。というのもあります。

こうした伝説が、田村麻呂とねふたとの関わりについて拍車をかけ、ついに、ねふたの起こりは、田村麻呂の蝦夷討伐にあったと信じて疑わない人まで出てくるほどでした。



黒石の人形ねぶた



勢ぞろいした黒石ねぶた

(六) おわりに

ねぶたの歴史れきしをふりかえってみると、遠く江戸時代えどまでさかのぼり、その形や絵柄えがらなども時代とともに大きく変わってきました。特に戦後は、ねぶた祭りそのものに対する人々の考え方も変わってきているように思われます。

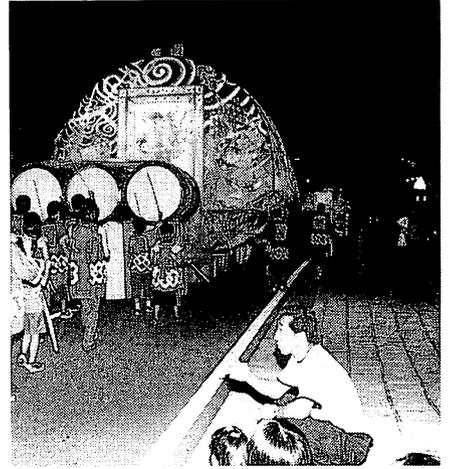
ここで、今一度ねぶたについてふりかえり、ねぶたの原点げんてんがなんであったのかを考えてみたいと思います。

夏の夜空に天の川をはさんで輝く牽牛かがや（彦星ひこぼし）と織女しよくじよ（織姫おりひめ）の二つの星。その星の伝説でんせつに思いをはせ、自分の願いの成就じょうじゆを書き、身も心も清めきよめ、罪つみや穢けがれを流し去り、五穀豊饒ごこくほうじゆうを祈り幸せさいせにくらせるように、しかも、それが自分だけでなく地域全体ちいきの幸せを祈る行事いの。それがねぶたであったはずです。

この先祖せんぞから受けついでた灯笼とうろうの芸術げいじゆつであるといってもよいねぶた。何より大事なことは、その伝統でんとうを守り、それを子どもたちに伝えていくことではないでしょうか。

そのことがよく行われているのが黒石ねぶたです。

黒石ねぶたの運行うんこうは、子どもたちが中心になっています。綱つなを



子どもたちのねふた囃子

引くのも、笛をふくのも、太鼓たいこをたたくのもほとんどが子どもたちです。大人たちは、これを支えささ、助けるといいうり方をとっています。

ねふた祭りが近づくと、遠くから近くから聞こえてくる子どもたちの練習するねふた囃子ばやしの太鼓たいこや笛の音に、知らず知らずのうちに郷愁きょうしゅうをかきたてられます。

ねふたは、この津軽つがるの地に生まれ暮らす人にとっては、「心のふるさと」なのです。

（「ねふた祭り」の執筆者 葛西正勝）



### 三 黒石よされ

#### (一) 「日本三大流し踊り」の一つ

「お祭り」と聞けば、だれだって何となくはずんだ気分になりますよね。

わたしたちのまち黒石市では、一年間を通していろんなお祭りが行われています。みなさんも、毎年心待ちにしているお祭りがきつとあるはずですよ。

そんなみなさんに「黒石市には、どんなお祭りがありますか？」とたずねたとしたら、「ねぶた」とともに必ずあげてくれるのが、あの「黒石よされ」ではないかと思っています。

「エチャホーエチャホー」のかけ声で始まるこの黒石よされ、みなさんもこれまでに、学校の運動会やその他の行事の場面でお友達と一緒に楽しく踊ったことがあるはずですよ。また、黒石よされの祭りに参加してお家の人や地域の方々と一緒に踊った経験のある人も多いことでしょうね。ところでこの黒石よされは、徳島県の阿波踊り、岐阜県の郡上踊りとともに、「日本三大流し踊り」の一つとして青森県内はもちろんのこと全国

的にも有名になって踊りだということを見なさん知っていましたか。「それ本当？」と思ったお友達もきつといると思います。

そこで、この機会に「黒石よされ」について少し勉強してみませんか。

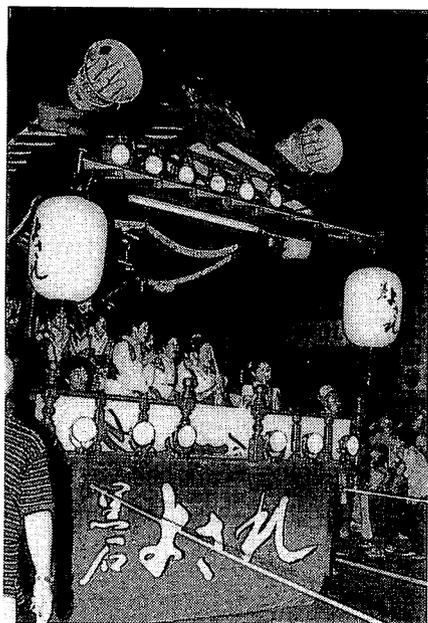
## (二) 全国に知られた黒石よされ

まず、東奥日報社発行の青森県百科事典に、黒石よされが次のように書かれていきますからみなさんがんばって読んでみましょう。

### 黒石よされ

「津軽の代表的な盆唄ぼんうたの一つ。黒石市を中心に歌われ踊られている。独特な「エッチャホー」というおはやしと優雅な流し踊りゆうがで有名。江戸時代、出羽てわ(山形県)の「庄内節しょうないぶし」別名「よしやれ節」が津軽に伝わり派生はせいしたといわれている。昔は送り盆三日間の行事として武士、町民の別なく無礼講ぶれいこうで踊った。明治の中期から盆踊りの取り締まりが厳しく一時断絶だんぜつしたが、昭和に入って復活ふっかつした。「黒石よされ節どこにもない、唄ってみしやんせ味がある」太鼓たいこ、三味線しゃみせん、鼓つづみの伴奏ばんそうで陽気に唄う。(以下略)」とあります。

現在の黒石よされは、八月十五日、十六日、十七日(十七日は花火大会



流し踊りはやし方

のみ)の三日間、黒石市の中心商店街で行われます。そろいの浴衣ゆかたを着た約三千人の踊り手による流し踊りと時折、円を描く輪踊りわは観客を巻き込んでの乱舞らんぶとなります。流れる汗をもとせずつ踊りに熱中する有様には見ていてすっかり興奮こうふんさせられます。「手足が自然に動いてしまつて気がついたらいつの間にか踊りの輪の中にのみこまれていました。」と話して下さった観光客ともお会いしました。

また、県内外から集まった踊り組による津軽民謡みんよう手踊りも行われます。それに最近ではテンポの速い黒石よされに合わせた創作の踊り、黒石よされニューバージョンも加わり以前にも増して熱気ある祭りになっていきます。

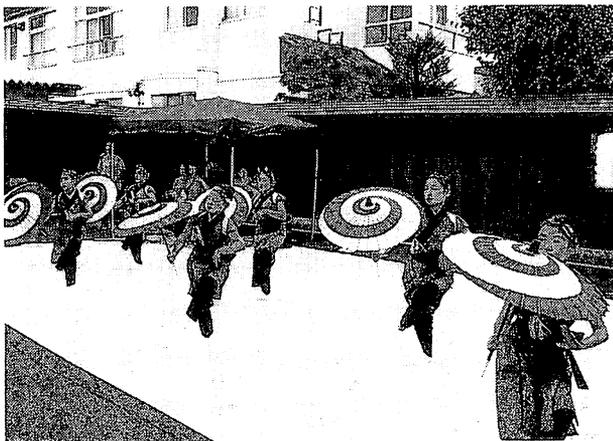
それから、黒石よされには「エチャホー」というかけ声があります。これは、田んぼに来るすずめを追いかける声を略したもので「あっちへいけ！ホイ！」がなまったものだそうです。

また、黒石よされの衣装いしやうは基本的に、背中にすずめが書かれている「すずめの浴衣ゆかた」、「たすき」、「おこし(男が青、女は赤かピンク)」、「頭に「トコマンポ(編み笠)」、足は「白たび」に「ぞうり」

# 流 し お ど り



# 組おどろ



だそうです。でも、流し踊りの時の衣装はそれぞれ自由です。さらに、よされの語源ごげんですが、これにはいろんな説があるそうです。でも今は、豊作で楽しいときは「仕事を止よして楽しみなさされ」、凶作きょうさくで苦しいときは「このような世よの中は去され」という辺りに落ちついているようです。

以前、「黒石よされ」は、「エッチャホー、エッチャホー」と

かけ声も高らかに町の通りを踊り流していき、途中の要所、要所で輪を作つて踊り、それを解いてまた踊り流していく、という「流し踊り」。津軽一円から集まった踊り組のチームが、町の所々に作られた舞台で、順番に熱演を繰り広げる「組み踊り」。広場（御幸公園）に三層の大きな「やぐら」を組み、みんなでぐるぐる回りながら踊る「回り踊り」などが行われていたことがあります。

今年の「黒石よされ」は、八月十五日、十六日、十七日に行われ、「流し踊り」と「組み踊り」が実施されています。「流し踊り」やその途中の輪踊りの中に、一般の観客が飛び入りで加わり、一緒に踊り続けるなどの盛り上がりを見せています。また、仮設舞台で行われている「組み踊り」の観客も多く、各チームそれぞれの特徴ある踊り振りに、時たまはやし声をかける、という熱気あふれる場となっています。

### (三) 黒石よされの歩み<sup>あゆ</sup>

石澤清三郎氏の著書<sup>ちよしよ</sup>である「唄と踊りの祭典 黒石よされ 五百年余の軌跡<sup>きせき</sup>」を参考にしながら黒石よされの移り変わりのポイントを書いてみます。

鎌倉時代から江戸幕府に入る約三〇四百年の間に行われていた山岳宗教の遺跡が黒石付近の山々にあります。この遺跡は、山間の部落の人達が集まって先祖の霊を祭るのに用いた「土盛り」で、当時の人達は年に一度盆になると先祖の霊が天に最も近い山に降りてくると信じていました。祭壇は、先祖の霊を迎えるものです。そして、先祖の霊の供養が終わると盆踊りが始まったのだそうです。

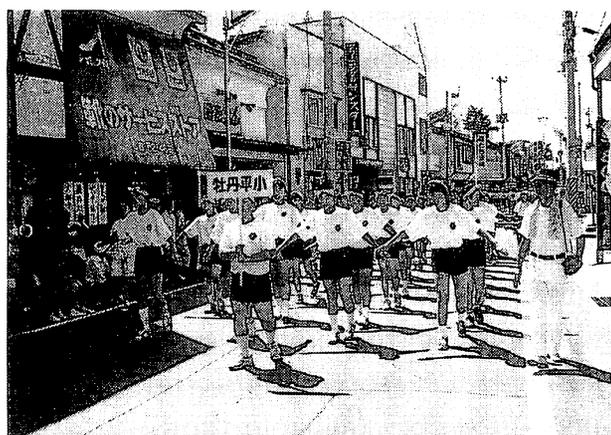
黒石の盆踊りが盛んになったのは、約二百年前の天明の頃、家老を勤めていた境形右衛門が、春の「馬乗り」、夏の「ネプタ」「盆踊り」を奨励したからだといえます。それは、当時の黒石は城下町といっても領地や人口も少なく、弘前領に取り囲まれていましたから弘前領の人達がたくさん黒石に来てくれないと経済的にやっていけなかったのです。つまり、町の繁栄のためにこれらの祭り、行事をすすめあげましたのだそうです。

また、この頃の盆踊りは、武士達も一緒になって踊ったということです。士農工商の身分制度のある時代を考えれば、武士と町人が一緒に、しかも盆踊りを踊るなんて驚きですよ。踊りに出るものはみんな仮装した、とありますから、そういうことも何か関係があったのでしょうか。いずれにしても黒石の盆踊りは、年々盛んになっていきました。

しかし、その盛んになった盆踊りに危機がやってきました。それは、明治八年八月に「盆踊りは風紀ふうきを乱す」という理由で禁止の通達が出たのです。ちなみに明治六年七月には「ねふた」も禁止となりました。中央の明治新政府には「みちのく津軽の祭りはなんでも野蛮やばんに映ったらしい。」と書かれています。それでも黒石では、巡査じゅんさの監視かんしつきながらけっこう踊っていたそうです。黒石の人達は本当に昔から盆踊りが好きだったのでしょうかね。

でも、明治三十年代に入り、黒石よされも長い冬眠に入る、と書かれています。年表を見れば外国との戦争が起こったりして世の中が不安定になってきたことと関係しているのかもしれない。そして、冬眠からさめたのは、長い長い戦争が終わった昭和二十年代となるのでしょうか。そしてまた、盆踊りはだんだんと盛んになっていったのです。

昭和三十二年には、黒石に古くからある黒石よされを盆踊り形式にしておいて誰でも気軽に踊れるようにしたいものだ、という願いが強まり、当時黒石レクリエーション協会の会長だった石澤清三郎氏の大変な努力によって、昭和三十三年に新黒石よされ回り踊りが完成しました。この年の夏まつりでは、御幸公園に組んだやぐらの周りは踊りに熱中する人の輪でふく



児童・生徒流し踊り

れあがり夜遅くまで盛り上がったということでした。

次いで、昭和三十五年の夏まつりには、初の「黒石よされ流し踊り」が登場しました。これも、本来のよされ元踊りの基本をそこなわないようにしながら誰でもかんとんに踊れるように振り付けしたものだそうです。浴衣ゆかたの図柄ずがらを稲穂いなほとすずめに決めたのもこの年で、揃そろいの浴衣姿ゆかたの五百人の黒石市連合婦人会による初の黒石よされ流し踊りは道路にあふれた観衆からヤンヤの拍手を送られたそうです。

そして翌三十六年には、静岡県で開かれた全日本民踊指導者講習会みんようで黒石よされが大変な好評を博し全国へ普及する第一歩をしるすことになりました。

それから子ども達もがんばりました。昭和六十二年から、小・中学生による児童・生徒流し踊りが始まったのです。市内のほとんどの小・中学校から参加した約千三百人の子ども達が御幸公園に集合し、そこから市の町、一番町、旧国鉄跡までの繁華街はんかがいを踊ったのです。小学生は短パン半そで、頭には豆しぼりの手ぬぐい姿、中学校女子は浴衣ゆかたを着ての参加だったと思っています。道の両側は、お父さんやお母さん、地域の人達でびっ

しりとうめつくされ拍手拍手でもう大変でした。本当に踊っている子ども達の表情は輝いていたことを今でも思い出します。踊り終えて駅前広場でいただいたジュースは特別うまかったですよ。

この児童・生徒の流し踊りは、十年間続いたそうです。みなさんのお兄さんお姉さん方も黒石よされ発展のために大いに汗を流して下さったことになりますね。

それからも、黒石市の最大イベントである黒石よされは、市民の意見も取り入れながら改善がなされ名実ともに日本三大流し踊りの一つに数えられるまでに発展してきたのです。正に、黒石よされは「黒石の宝物」と言えるでしょう。

#### (四) おわりに

わたしたちのまち黒石は、自然が豊かで景色が優れ温泉もわいています。また、津軽伝承工芸館や津軽こけし館、浄仙寺等の観光関連施設もあれば、黒石よされ、ねぶたまつり、黒石さくらまつり等の祭りも多いまちです。ですから、それらを多くの人に見てもらい参加してもらうために、今ある観光資源をどのように整備するか、どのように見せるか、もっとうずもれ

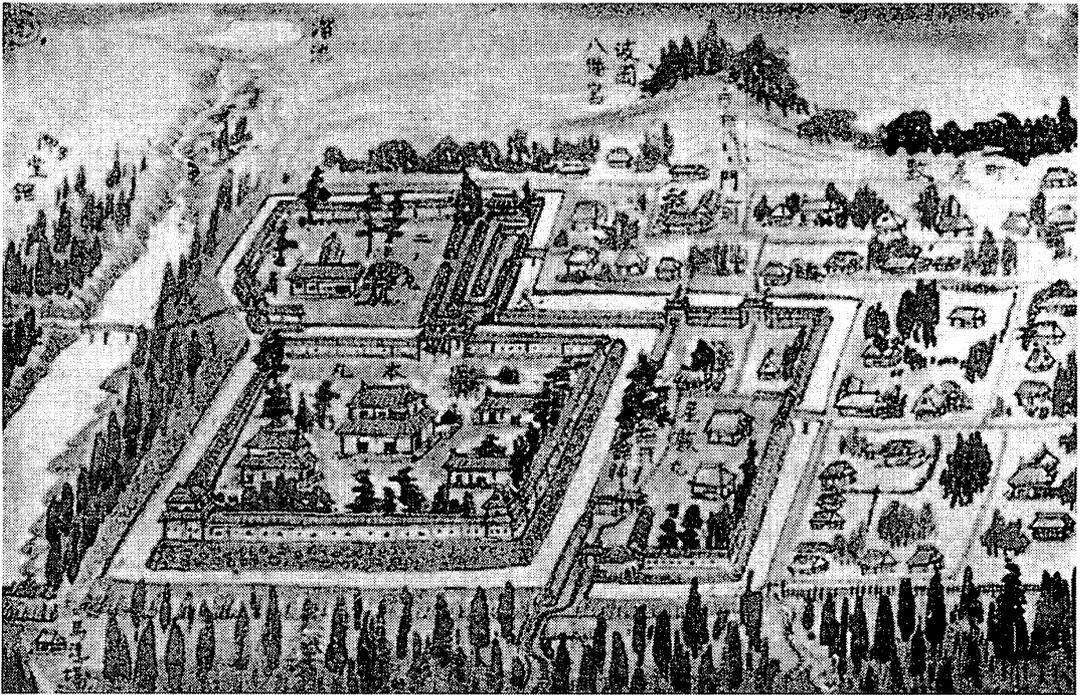
ている観光資源はないか等々黒石市ではいろいろと努力してきました。

黒石よされについても、ちめいど知名度を高めるためにポスター、雑誌、インターネット等の手段を使って県外への宣伝に努めていますし、一般の参加者を増やすために市民の意見を取り入れながら祭りそのものの改善にも努めてきました。みなさんも黒石市の宝であるこの黒石よされに大いに関心を持ち将来に向かって大事に守り育てていってほしいものです。

五百年もの昔から黒石の人々に愛され、親しまれ、受け継がれてきた「黒石よされ」、この祭りをますます盛んにし、町の発展へとつなげていくのは、よそからおい出になる観光客ではなく、みなさんをふくめた黒石市民一人ひとりなのではないでしょうか。

「黒石よされは、見ても楽しいかもしれないけど参加してこそ楽しい祭りなのでですから、とにかく、子ども達もお家の人と一緒に祭りに参加して踊ってほしい!と思います。」これは、今までのお話を書くにあたっていろいろと教えて下さった黒石観光協会の杉澤ヒロ子氏の言葉です。黒石よされ発展への強い願いが込められた言葉だと今も印象に残っています。

（「黒石よされ」の執筆者 田澤郁夫）



昔の浅瀬石城の図

## 四 浅瀬石の「灯笼流し」とうろう

### (一) お城があったころの浅瀬石

浅瀬石の地域の人々は、お盆の行事として「灯笼流し」とうろうを行っています。述べていくお話を基にして、地域の人々が大事にしている行事の意味を考えることにしましょう。

浅瀬石の地域は、現在残されている史跡をたどってみても、昔、そこで暮らした人々の歩みに心引かれ、歴史の息吹を感じさせる土地でもあります。

昔の浅瀬石にはお城がありました。

(掲載している「浅瀬石城の図」は、昔に書かれた原図を基にして製作されたものです。建物は状態を予想して書かれています。が、橋・土の囲み・石垣・杉の林・道路などは原図に基づいて書かれています。昔の浅瀬石城を思い浮かべ